

「天明の京都大火」において焼失を免れた歴史的建造物の特性

The Analysis of Historic Buildings Escaped Burning Down by the Conflagration in 1788

中村琢巳¹・塚本章宏²

Takumi Nakamura and Akihiro Tsukamoto

¹立命館大学 グローバル・イノベーション研究機構 ポストドクトラルフェロー

歴史都市防災研究センター (〒603-8341 京都市北区小松原北町58)

Post Doctoral Fellow, Ritsumeikan University, Research Center for Disaster Mitigation of Urban Cultural Heritage

²立命館大学 衣笠総合研究機構 ポストドクトラルフェロー

歴史都市防災研究センター (〒603-8341 京都市北区小松原北町58)

Post Doctoral Fellow, Ritsumeikan University, Research Center for Disaster Mitigation of Urban Cultural Heritage

This paper deals with the Great Fire of Tenmei in 1788, which caused catastrophic damage to Kyoto, and discusses characteristics of buildings that escaped the disaster. In order to reconstruct the fire damages in the past, we conduct comparative analysis of field survey of historic buildings which survived from the conflagration and kasai-zu (maps of fire disaster). By doing so, we identify temples and shrines that survived in the affected areas. An architectural study of these historic buildings helps us understand what kinds of buildings were fire resistant, and what kinds of physical conditions prevented fire from spreading from one building to others.

Keywords : *conflagration of Tenmei era, burnt city area, historic building, old maps*

はじめに

本稿は近世京都における最大規模の市街地大火である「天明の大火」（天明8年・1788）に関する研究の続稿である。前稿^{注1}では江戸時代に作成された複数の火災図（かわら版）に描かれた被災域を復原し、それら復原被災域の相互が相違する意味を論じた。すなわち、複数の火災図に描かれた被災域をGISを用いて統合し、これを歴史的建造物の被災履歴と比較することで、火災図を評価（史料批判）できる視点を述べた。

続く本稿では、前稿で復原された被災域と現存する歴史的建造物を比較することで、天明の大火で焼失を免れた建造物を評価する。

天明の大火に関する既往研究には、江戸時代の記録を収集した上で歴史的評価をこころみた安国（1996）^{注2}をはじめ、被災域を描く火災図を検証した伊東（2008）^{注3}、被災域の地図化を行った丸畑（2001）^{注4}や田中（2003）^{注5}がある。こうした既往研究では、二条城等に代表される個別の文化財建造物が被災を免れた点が指摘されるものの、焼失を免れた建造物の広範な分布状況は把握されていなかった。

これに対して中村（2011）は、京都市街地における寺社境内の悉皆的な現地調査によって、独自の歴史的建造物GISデータベースを構築した^{注6}。このデータベースは、災害リスク評価といった防災計画策定の基礎資料として活用できるとともに、天明の大火で焼失を免れた歴史的建造物の分布を市街地全域にわたり把握することが可能となった。今回の一連の研究における方法論上の特色は、火災図にもとづく被災域復原に^{注7}、この歴史的建造物データベースを統合する点にある。

この方法の有効性のひとつは、非焼失建造物を考慮することで、前稿で示したように火災図による被災域の地理的状况を評価できることである。さらに地理的な被災域というスケールを超えて、建物レベルで当時の被災状況をより詳しく追跡できる。例えば、被災域に近接しながら延焼を免れた建物、あるいは被災域に立地しながら焼失を免れた建物が抽出される。こうした歴史的建造物の情報を整理・分析することによって、

歴史上の災害復原から、防災・減災の教訓を得る分析手法が想定される。すなわち本稿は、天明の大火を対象としたケース・スタディであるとともに、災害復原を防災研究へ展開させる手法提案も意図する。

1. 歴史的建造物にみる被災域の特徴

(1) 歴史的建造物から推定した被災域

まず、天明の大火で焼失を免れた歴史的建造物の現存状況から、その被災域の全体像を俯瞰的に把握しよう。図1は天明の大火で焼失を免れた歴史的建造物379棟^{注8)}と、文献から被災が確認された寺社境内160ヶ所^{注9)}の分布状況を示したものである。このふたつの分布状況の特徴を明示するため、天明の大火の最大被災域と最小被災域を推定した。

最大被災域は非焼失建造物（青点）から作成した領域である。非焼失建造物は歴史の実態としての被災域の外側に分布すると想定できる。すると、最大面積となるように非焼失建造物の内側で連結された領域内（青線）に、歴史の実態としての被災域が推定される。逆に、最小面積となるように被災寺社（赤点）の外側で領域（赤線）を作成することで、最小被災域を推定した。この最小被災域の外側に、歴史の実態としての被災域が想定される。

(2) 出火地点との関係

こうして推定された最大被災域と最小被災域を検討すると、天明の大火による被災状況の地理的広がりの特徴が抽出される。それは市街地の北方でみられる最大・最小被災域が逆転する地域が存在である。

両者の推定被災域の関係をみてみたい。作成手順からすれば、焼失を免れた歴史的建造物から推定した最大被災域が、被災寺社から推定した最小被災域の外側に立地すると考えられる。しかし、他地域に比べて市街地北方で最大・最小被災域の逆転が明確に読み取れる。この傾向は、当該地域で被災寺社と非焼失建造物の混在状況が高まることを意味する。

この状況の原因に、当該地域と出火点との位置関係が推察される^{注10)}。当該地域は出火点から最も離れた地域であり、火災の到達まで時間を要したと考えられる^{注11)}。さらに火災規模の減少とあいまって、他地域に比べて消火活動等の対策が講じえた可能性もあろう。

2. 被災寺社と非焼失建造物の混在地域

それでは、被災寺社と非焼失建造物が混在する地域の被災状況を、前稿で復原された被災域と歴史的建造物を統合させて検証していこう。被災域として用いたのは、「〔改正両面〕京図名所鑑」（京都市歴史資料館所蔵、

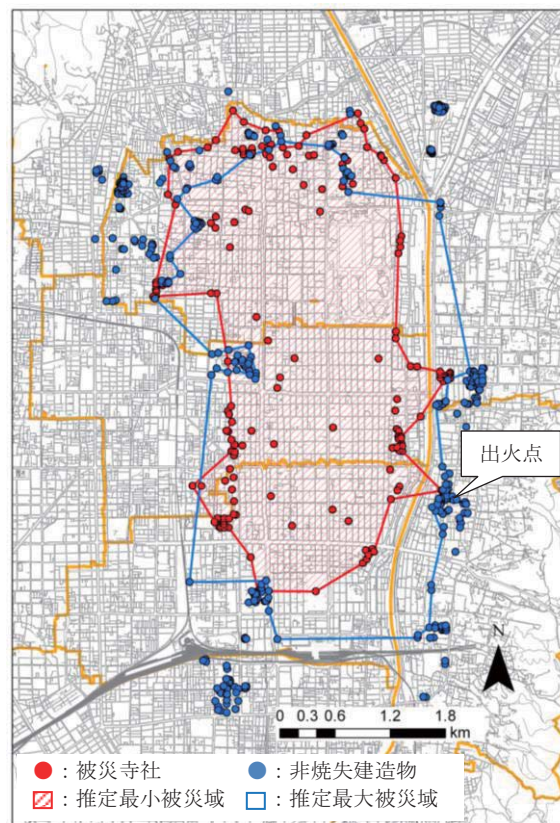


図1 天明の大火の推定最大・最小被災域
背景図：ゼンリン Zmap-TOWN II

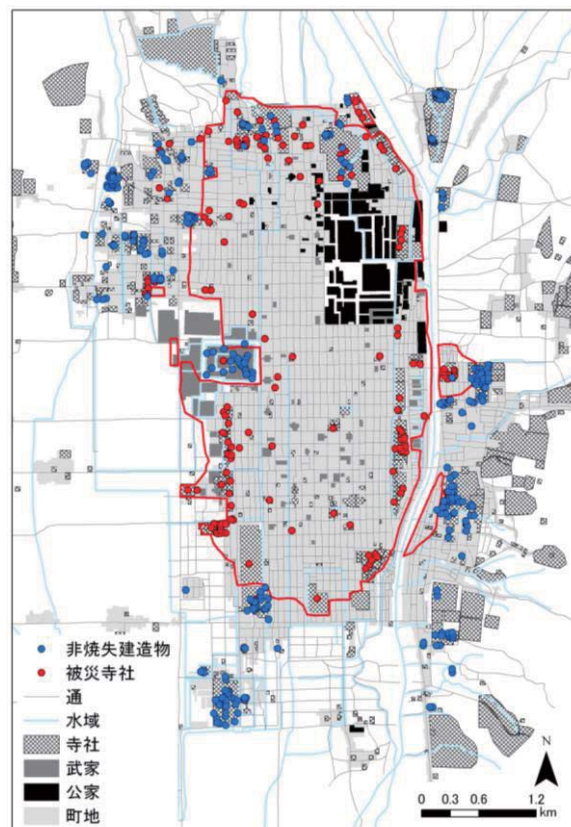


図2 天明の大火の復原被災域と被災状況
復原被災域（赤線）は「京図名所鑑」による
背景図：『京都の歴史・第5巻』付図

大塚コレクション0363) による復原である^{注12)}。この作業によって、既往研究でみられる火災図のみからの被災域復原に比して、詳細な被災状況の把握が可能となる。さらに、現存する歴史的建造物と延焼地域との関係も把握される点が防災情報を抽出する観点から有効といえる。

(1) 西陣付近

天明の大火に関する火災図では、被災域の西端を「千本通」まで描くものがみられる。実際に、復原被災域の西北部をみると、千本通付近で延焼が北上する様子がうかがえる。ただし、千本今出川付近で被災寺社の分布をみると、千本通の西側にも延焼が広がっていた様子が確認される。すなわち、大報恩寺本堂（千本釈迦堂、国宝）の間近まで、延焼が迫っていた被災状況が確認される（図3）。

ここで火災図（図4）の被災域の描写に着目したい。千本通の東側に立地する浄福寺（図5）^{注13)} および本隆寺（図6・7）^{注14)} はともに、非焼失建造物が現存する境内である。しかし、大火を免れた浄福寺は被災域の内側として描かれている。その一方で、本隆寺の境内は、明確に被災域が迂回して、被災域の外側として描写される。これは、江戸時代当時の被災状況の情報の伝わり方と関わるものが推察される。つまり、本隆寺が被災を免れた事実が当時から市中に広まっていたのであろう。

さらに、本隆寺には消火活動に関わる伝説が伝わる。大正9年に境内に造営された石碑によれば天明の大火に際して、「当山亦火焰に囲まれて猛火は本堂の巽柱迄全燃上り今や大事に至らむとす忽ち見る異容の婦人提桶を携へ傍の千代の井戸を汲むて防火に力む」（「不焼寺記」碑文）とされる。「巽柱」すなわち南東の箇所延焼が及んだ記述と、実際に井戸が本堂の脇・南東側に現存する立地状況が注目される。この位置関係は、出火点から当地まで延焼が広がる位置関係と整合するためである。

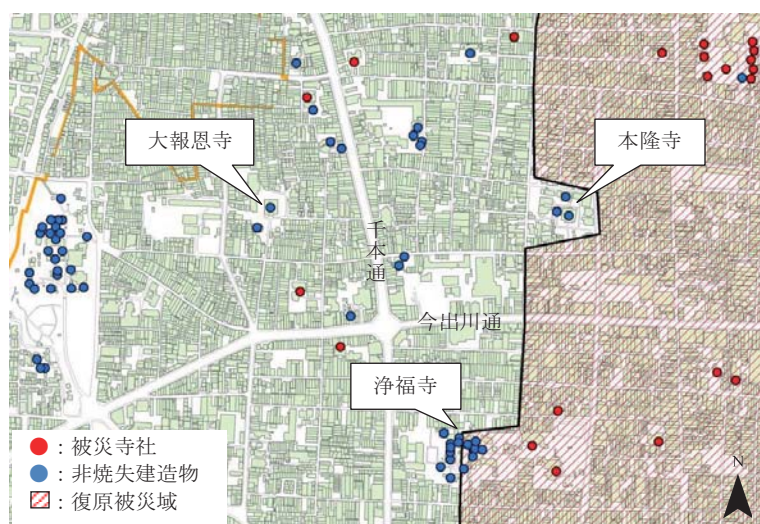


図3 西陣における復原被災域と被災状況

復原被災域は「京図名所鑑」による
背景図：ゼンリン Zmap-TOWN II



図4 火災図（「京図名所鑑」，部分）

京都市歴史資料館所蔵・大塚コレクション



図5 浄福寺・本堂



図6 本隆寺・本堂



図7 本隆寺・祖師堂

(2) 寺之内付近

日蓮宗の本山寺院が集まる堀川寺之内付近は火災図による復原では被災域で占められる。復原被災域と非焼失建造物を重ね合わせてみると、ほかの地域に比べて被災域の内側にも非焼失建造物が点在する傾向が読み取れる（図8）。

具体的な非焼失建造物をみると、本法寺・経蔵（享保19年・1734，図9）、妙蓮寺・鐘楼（元和9年・1623，図10）、妙顕寺・釈迦堂（17世紀前期）、妙覚寺・御堂（17世紀中期）、興聖寺・仏殿（元禄2年・1689，図11）などが挙げられる。

いずれの寺院も、境内のなかで焼失した建物と焼失を免れた建物が混在する。ほとんどの寺院で本堂が焼失したなか、興聖寺仏殿が焼失を免れている点は注目されよう。妙蓮寺鐘楼や妙顕寺釈迦堂、妙覚寺御堂などはいずれも小規模な建物でありながら、周辺に比較的空き地が広がる立地環境にあることで共通する。

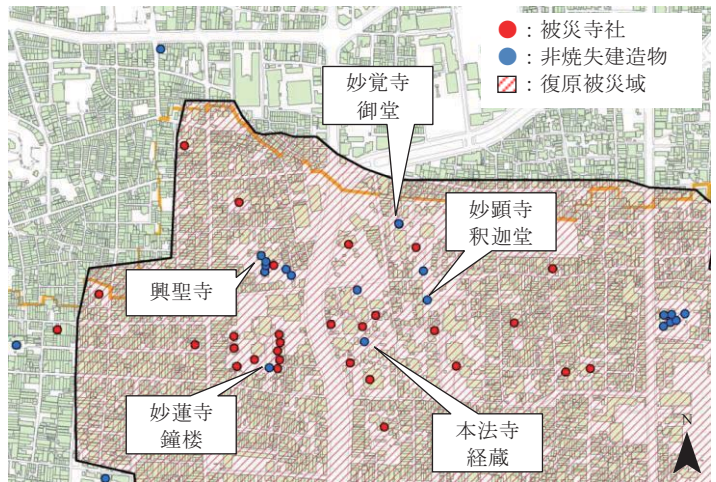


図8 寺之内の復原被災域と被災状況

復原被災域は「京図名所鑑」による
背景図：ゼンリン Zmap-TOWN II



図9 本法寺・経蔵



図10 妙蓮寺・鐘楼



図11 興聖寺・仏殿

(3) 御霊神社・相国寺付近

「天明大火図」（京都市歴史資料館所蔵，図12）をみてみたい。これによると、御霊神社（「上御霊」と表記される）から相国寺付近の一带の描き方に特徴が見出させる。すなわち、御霊神社と相国寺付近で被災域が迂回し、被災を免れた描き方がみてとれる。このほかの火災図でも、御霊神社は焼失を免れたことを強調する描写が多い。

非焼失建造物の分布図（図13）をみれば、御霊神社には絵馬堂（宝暦年間，図14）といった歴史的建造物が現存し、実際に被災を免れたことが確認される。それに対して、御霊神社の南方に境内を構える相国寺は（図15・16）、塔頭が軒をつらねる境内のなかでも焼失した建物と非焼失建造物が複雑に混在する^{注15)}。火災図の多くは、相国寺および塔頭寺院の大半が被災した点を明示したものであろう。

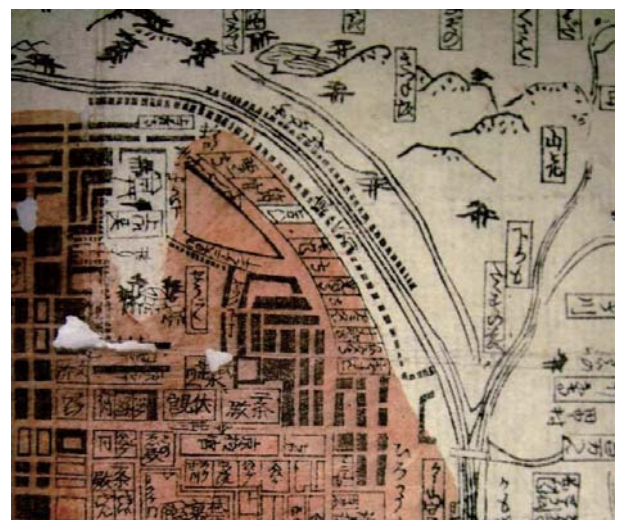


図12 火災図（「天明大火図」，部分）

京都市歴史資料館所蔵・大塚コレクション

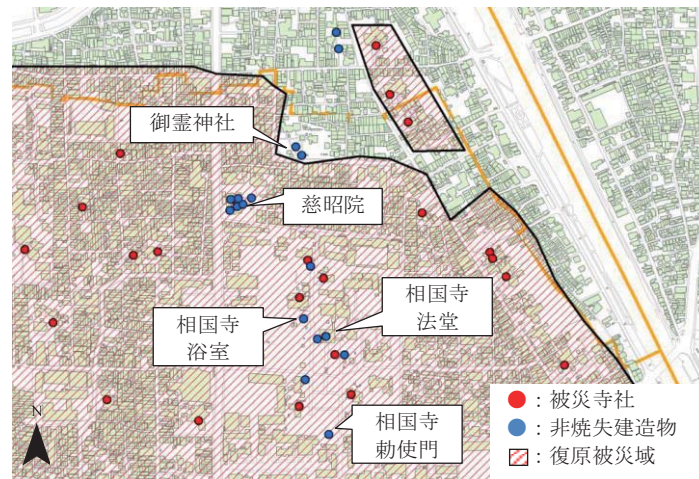


図13 相国寺付近の復原被災域と被災状況

復原被災域は「京図名所鑑」による。背景図：ゼンリン Zmap-TOWN II



図14 御霊神社・絵馬堂



図15 相国寺・法堂



図16 相国寺・浴室

(4) 二条新地付近

二条新地は「宝永の大火」（宝永 5 年・1708）後に中心市街地から鴨川東へ寺院が集団移転してきた地域である^{注 16}）。天明の大火では鴨川対岸から飛び火し、火災図でも当地の被災が描かれる（図 17）。しかしながら、西寺町通沿いに大火を免れた歴史的建造物（宝永の大火復興期の造営）が群として現存し（図 18）、歴史的町並みを維持する（図 19）。火災図（図 17）では、二条新地全域が被災しているように描かれる。これに対して、非焼失建造物の分布から実際は復原被災域のように西寺町通付近で延焼が止まったことが確認できる。また檀王法林寺は火災図（図 17）でも焼失を免れたことが強調されるとおり、現在でも大火以前の歴史的建造物（図 20）をみることができる^{注 17}）。要法寺も同様に、天明の大火を免れた安永 3 年（1774）の本堂を維持する（図 21）。なお、鴨川近くの頂妙寺は塔頭を含めて境内全域が被災した。しかしながら、その被災域のなかで、土蔵が焼失を免れて現存する。



図17 火災図（「京都天明八戊申年大火」，部分）

京都市歴史資料館所蔵・大塚コレクション

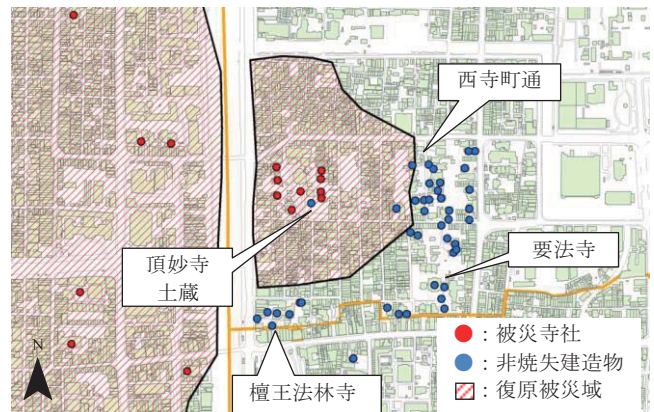


図18 二条新地の復原被災域と被災状況

復原被災域は「京図名所鑑」による
背景図：ゼンリン Zmap-TOWN II



図19 西寺町通の景観



図20 檀王法林寺・本堂



図21 要法寺の景観

(5) 出火地点（建仁寺付近）

建仁寺は天明の大火の出火点の東側に境内を構える（図 22）。しかし、建仁寺の仏殿（明和 2 年・1765，図 23）や勅使門（鎌倉時代後期，図 24）、禅居庵本堂（室町時代，図 25）をはじめとする文化財建造物が焼失を免れた。塔頭寺院の大半も、出火点に近接しながら延焼が及ばなかった。その一方で塔頭・興雲庵は被災した記録が「寺院明細帳」に残り、延焼が間近に迫っていたことが確認される。

市街地全域に延焼範囲が及びながら、出火点に近接する建仁寺境内の大部分が焼失を免れた点は注目されよう。風向きがその要因として推察されるが、建仁寺が罹災を免れたことに対する評価は気象条件も含めた今後の研究を俟ちたい。

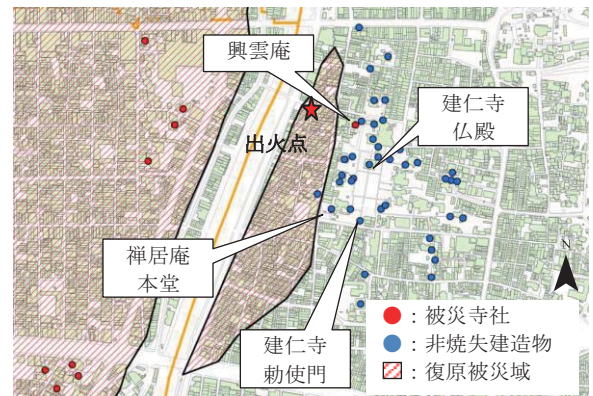


図 22 出火点の復原被災域と被災状況

復原被災域は「京図名所鑑」による
背景図：ゼンリン Zmap-TOWNII



図23 建仁寺・仏殿



図24 建仁寺・勅使門



図25 禅居庵・本堂

3. 焼失を免れた歴史的建造物の特性

(1) 立地（周辺環境）の特徴

以上で地域ごとに、被災状況を現存する歴史的建造物に即して検討した。次に、被災域にありながら焼失を免れた建造物の特性を整理していこう。

まず地域的傾向をみてみよう。被災域内にありながら非焼失建造物が点在する地域に着目すると、西陣や寺之内、相国寺付近といった市街地北部に多い。出火点に近い市街地南部をみても、西本願寺や二条城で被災建物と非焼失建造物の混在がみられるほかは^{注18)}、寺之内のような非焼失建造物の点在は確認できない。

また境内が被災したなか、非焼失建造物が現存する事例も共通性が指摘できる。寺之内の妙蓮寺や妙頭寺、妙覚寺でみられたように、焼失を免れたのは比較的に空地に囲まれた鐘楼や小さな境内仏堂であって、大規模な本堂は焼失する傾向にあった。こうしたなか、被災域にありながら焼失を免れた本堂として、本隆寺、浄福寺、興聖寺、相国寺法堂（仏殿は焼失）と塔頭・慈昭院が挙げられる。

立地の特色として、西本願寺に伝わる「火伏銀杏」も注目される（図26）。天明の大火で延焼が間近に及んだ際に、境内の銀杏の大き木が消火した伝説が伝わる^{注19}。同様の寺伝が本能寺（図27）にも伝わる^{注20}。これらの伝承は樹木の延焼抑止効果を物語る可能性があるが、本稿では事例紹介にとどめたい。



図26 西本願寺・御影堂門



図27 本能寺・境内

（2）土蔵造りの建物群

焼失を免れた歴史的建造物の建築類型として指摘できるのは、土蔵造りの建物が多くみられることである。本法寺や頂妙寺などは境内のほかの建物が焼失するなか、土蔵のみが焼失を免れた。また本調査では記録から天明の大火以前の造営になることが明確な建物を抽出している。そのため、実際には市街地全域に焼失を免れた土蔵がさらに広範に現存することが予想される。

4. 結び

本稿では、前稿で復原された天明の大火被災域に、非焼失建造物を重ね合わせて、その被災状況を現存する歴史的建造物に即して検討した。これによって、従来の災害復原より詳細な被災状況の把握が実現した。さらに、被災域にありながら、焼失を免れて現存する歴史的建造物を抽出することができた。これらの非焼失建造物は、当該地域で大火により失われたその地域の歴史・都市景観を物語る数少ない存在である。つまり、こうして生き残った歴史的建造物は、高い歴史的価値を有する文化遺産とも評価されよう。

本稿の主眼は、歴史上の災害復原を通して、防災の観点から着目できる非焼失建造物を抽出する手法を提示することである。そのため、非焼失建造物に共通する立地環境や土蔵造りといった建造物の特性を検討したが、あくまで概略を指摘したにとどまる。抽出された非焼失建造物のさらなる火災安全性評価の検討などが、今後の研究展開として想定される。

これに加えて、天明の大火以外の市街地大火へと研究対象の拡大も検討している。天明の大火以外の被災域を描く火災図も多数が現存し、さらにそれら大火後に再建された歴史的建造物の現存状況も既に把握しているからである。江戸時代全体を通じた大火被災域と歴史的建造物の分布を統合した比較も可能であり、大火履歴からみた歴史都市・京都の評価を継続して進めたい。

付記：本稿で使用したゼンリンZmap-TOWN IIは立命館大学文学部地理学教室からの提供による。本研究は、文部科学省グローバルCOEプログラム「歴史都市を守る『文化遺産防災学』推進拠点」の支援を受けた。

注

注1) 塚本・中村による参考文献1) では複数の火災図に描かれた被災域をGISを用いて復原・統合し、これを歴史的建造物の被災履歴と比較することで、最も歴史の実態に近い火災図を評価できる視点を提示した。

注2) 日本史分野で天明の大火を総括的に論じたものが参考文献2) である。ここでは、同時代の記録に基づき、大火の被災状況から復興過程にわたり、人々の行動や社会的背景、さらに災害観にわたり幅広く論じられる。

注3) 参考文献3) では、京都市歴史資料館所蔵「大塚コレクション」に収録された火災図を整理し、その史料的情報が論じられる。

注4) 参考文献4) では、平安時代から江戸時代における京都の都市大火の歴史を整理し、火災の概要とそれぞれの被災地の地図がまとめられる。

注5) 参考文献5) は丸畑による参考文献4) を踏まえて、京都の都市大火史が被災地図とともに簡潔にまとめられる。

注6) 京都市街地の寺社に現存する歴史的建造物GISデータベースの構築手順やその調査結果の概要については、参考文献6) 7) 8) を参照のこと。

注7) 火災図を用いた天明の大火における被災域復原に関しては、田中哮義氏をはじめとする既往研究で復原案が作成されており、その成果と復原案に対する評価は前稿（参考文献1）で詳述した。

注8) 天明の大火における非焼失建造物の抽出は、参考文献6) による歴史的建造物データベースを活用した。すなわち、京都市街地の寺社に現存する昭和戦前までに建てられた建物2130棟のうち、文献および様式判定から天明の大火以前の造営になるものを抽出した。さらに、京都市街地の寺社以外で、天明の大火以前に造営された二条城内の文化財建造物（24棟）および角屋（1棟）を追加した。なお、天明の大火で被災し、その後に古建築を移築したものに関しては、大火発生時に当該地に存在していなかったものであり、非焼失建造物からは除外している。

注9) 被災寺社の抽出は、京都府庁文書「寺院明細帳」「神社明細帳」（京都府立総合資料館所蔵）ならびに『京都府の近世社寺建築』で天明の大火による被災が明記された境内とした（天明の大火後から現在までに移転した境内は除く）。これら寺社に、本丸御殿等が焼失し被災が明らかな二条城を追加した。

注10) 天明の大火を「団栗焼け」と通称するように、出火地点は鴨川東の団栗図子である。火災図にも当該地点に丸を示したうえで「火元」と書き込む描写がみられる。

注11) 天明の大火の発生は天明8年正月晦日未明で、鎮火は2月2日未明とされる。

注12) 前稿では、京都市歴史資料館が所蔵する火災図のうち、通名や寺社名から被災域復原が可能な6枚の火災図に基づいて、6種の復原被災域を作成した。このうち、千本通付近に関して最も描写が詳細な「京図名所鑑」を選定した。

注13) 浄福寺境内には、享保17-18年（1732-1733）に造営された本堂（京都市指定有形文化財）が現存する。

注14) 本隆寺境内には明暦3年（1657）に造営された本堂（京都府指定有形文化財）が現存する。しかし、「寺院明細帳」の記載には「鎮守堂」が天明の大火で焼失したと記載されており、境内の南側は被災域に含まれていた。

注15) 相国寺法堂および浴室・勅使門等は焼失を免れたが、法堂の南側に位置した仏殿および表門は焼失した。

注16) 宝永の大火に関しては、『京都の歴史（第6巻）』（pp60-61）に詳しい。

注17) 檀王法林寺境内には、宝暦12年（1762）に造営された本堂（京都市指定有形文化財）が現存する。

注18) 西本願寺は両堂（阿弥陀堂・御影堂）が被災を免れて現存するが、堀川通沿いの北側に位置する阿弥陀堂門は焼失した（『京都府の近世社寺建築』p164）。一方で、堀川通沿いの南側に立地する御影堂門（現存）は焼失を免れた。

注19) 西本願寺の銀杏は、京都市天然記念物に指定されている。

注20) 「火伏」の伝説が残る本能寺境内の銀杏は現在、京都市保存樹に指定されている。

参考文献

- 1) 塚本章宏・中村琢巳：歴史的建造物の被災履歴と火災図を統合した「天明の京都大火」被災範囲の復原，歴史都市防災論文集Vol.5，2011。
- 2) 安国良一：京都天明大火研究序説，日本史研究412，pp53-77，1996。
- 3) 伊東宗裕：京都の火災図ー京都市歴史資料館蔵大塚コレクションについて，京都歴史災害研究・第9号，pp13-20，2008。
- 4) 丸畑充秀：平安～江戸時代における京都大火，京都大学工学部建築学科卒業論文，2001。
- 5) 田中哮義：A SHORT HISTORY OF FIRES IN KYOTO，International Symposium on Protection of Cultural Heritage Buildings from Fire，Disaster Prevention Research Institute Kyoto University，pp1-17，2003。
- 6) 中村琢巳：京都市街地の寺院・神社における歴史的建造物の現存状況についてー寺社建築GISデータベース構築による京都市街地における文化遺産のストック評価（その1），日本建築学会関東支部研究報告集Ⅱ，pp623-626，2011。
- 7) 中村琢巳：京都市街地における文化遺産集積地域の評価一同（その2），日本建築学会関東支部研究報告集Ⅱ，pp627-630，2011。
- 8) 中村琢巳：近世京都の大火履歴からみた寺社建築の分布特性一同（その3），日本建築学会近畿支部研究報告集51（計画系），pp865-868，2011。
- 9) 京都市（編）：京都の歴史（全10巻），1968-1976。
- 10) 京都府教育委員会（編）：京都府の近世社寺建築ー近世社寺建築緊急調査報告書，1983。